

選手権大会を終えて

～ 第103回全国高等学校野球選手権秋田大会で感じたこと ～

秋田県高等学校野球連盟

会長 尾形 徳 昭

新型コロナウイルスの影響で2年ぶりに開催された第103回全国高等学校野球選手権秋田大会は、県内屈指の投手力を誇る明桜高校の、4年ぶり10度目の優勝で幕が閉じられました。優勝が決まった瞬間、明桜高校の選手たちは喜びを爆発させましたが、その背景には、今年の優勝の喜びに加え、昨年この大会の代替大会では優勝したものの、甲子園に行けなかった悔しさがあったことは、容易に推測できました。また、その前には2年連続で決勝戦で敗退していましたので、その無念さもあったでしょう。本当に耐えに耐えてつかんだ優勝なんだな、という感じがしました。喜びが爆発するのも無理はありません。本当におめでとうございました。

一方、準優勝の秋田南高校。悲願の甲子園初出場をかけて決勝戦を戦いましたが、残念ながら一步及ばず、夢は叶いませんでした。しかしながら、前半は先制のチャンスを作るなど、優勝した明桜高校を動揺させる場面も見られました。甲子園への道はそう遠くないと思います。今大会の反省を活かし、新しいチームは、先輩が残してくれた財産を胸に頑張りたいと思います。

今大会を開催するにあたり、一番に心配されたのが新型コロナウイルスの感染拡大でした。高校野球観戦が楽しみで、応援にきてくださる方々への感染防止と、選手や学校関係者、大会関係者への感染防止を徹底させながら甲子園出場校を決める大会にするために、秋田県医師会や秋田県教育委員会、日本高野連や朝日新聞社等からの御教示や御指導を仰ぎながら、最終日まで運営して参りました。大会期間中は観客の皆様の御理解と御協力を得、忙しいこともありましたが、一人の感染者も出さずに（7月30日現在）大会を終えることができました。皆様には、この場を借りまして、改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

今大会は少子化の影響もあり、参加41チーム（加盟校は43、連合チーム2、部員無し1、登録部員1600名）であった。野球は最低9人の人数が必要なゲームなので、少子化はとても大きな問題である。また、幼少時から野球をする子供が少なくなっているのも事実のようである。しかし、そんな状況の中でも、「甲子園球場」でプレーすることにあこがれて、暑い日も寒い日も、雨の日も風の日も、雪が降っても積もっても、多少体調が悪くても、日々練習する選手たちのことを思うと、自然と胸が熱くなっていく。

大会会長としてネット裏で試合を見ていると、選手のその時々表情がよくわかる。得点のチャンスでバッターボックスに入る打者。絶対に打たれてはいけない場面での投手。心臓の音まで聞こえてきそうな緊張感の中で時間は流れていき、結果が出る。上手くいけば歓喜が爆発し、そうでなければ、がくっと膝を落としたり、天を仰いだりする。何度となく見てきた光景だ。勝負事なので勝つこともあれば負けることもある。これは仕方ないことだ。けれども、必死に戦っている場面、その瞬間の選手たちは皆必死で、輝いている。そこには微塵の差も優劣もない。勝つことを目指してみんな努力してきた。これも皆素晴らしいことだ。今は気づかなくても、高校時代に甲子園を目指して野球にすべてを賭けてきたことが、きっと大きな財産となる。そして「あの時はよくやったよな！」が共通の合い言葉になってくれることを願って止まない。まもなく甲子園大会が始まる。甲子園と聞いただけで落ち着かない。そこでプレーする選手を見て、胸が熱くなる。頑張ったからこそ、体は一生覚えている。忙しいこともあるが、高校野球に携われることに感謝している。

2021年7月30日

(つづく)

7月10日土曜日。この日は1回戦9試合のうちの最後の試合の日で、秋田高専と雄物川の試合のみがこまちスタジアムで行われた。実力伯仲の両チームの試合は9回で決着がつかず(7-7)、ついに延長戦へ。12回を戦っても双方譲らず、ついに試合は今大会唯一のタイブレークとなった。結果は10-9で秋田高専の勝ちとなったが、3時間を超える熱戦で、両チームは持てる力の全てを出し尽くしたのではないかと思われる。今大会を機に引退する3年生は両チーム合わせて10人いるが、思い出に残る試合になったのではないだろうか。最後まで諦めず、精一杯頑張る球児の姿に、また一つ高校野球から感動をもらった。

今大会に参加したチームの中に、連合チームは2つあった。1校で部員数が9人に満たない学校で活動している選手に、他校と連合してチームを編成し、大会に出場する機会を与える制度である。大会で両チームの戦いぶりを見る機会はなかったが、テレビの特集でチームの紹介をしている場面を拝見した。「練習や試合を繰り返すことでだんだん仲良くなり、いいチームになった。連合魂で1つでも多く勝ちたい。」「みんながいたから甲子園を目指すことが出来た。最高の仲間感謝している。」どんな形であれ、甲子園を目指すことで球児たちが人間的に成長している姿が嬉しかった。このあとの高校生活でも、この経験を生かして頑張りたい。

今から18年ほど前まで、高校野球の監督として16年間生徒を指導した経験がある。選手も大変だが、それを指導する先生方も大変だ。時には家族より選手たちと過ごす時間の方が長くなることもある。指導するきっかけはいろいろあるだろう。「選手で甲子園に行けなかったから、今度は指導者で」、「指導してもらった先生にあこがれて」、「高校野球の素晴らしさを後進に伝えたくて」、「単に野球が好きだから」・・・。けれども、好きなだけではなかなか続けられない大変さもあるのではないだろうか。暑い日も寒い日も、雨の日も風の日も、それこそ土日の休みもなく、勝っても負けてもその指導は続けられていく。相当な体力と気力が必要である。

この文章を書いていたら、さきがけ新聞の『コンパス』というコラムの欄に「指揮官の涙」というタイトルの記事が載っていた(8月1日付)。今大会の中の「グラウンドでは知り得ない物語」の1つの紹介であったが、その通りだな、と感じた。10のうち9が辛くても、1つ嬉しいことがあればそれで続けられるのかな、と。それだけでは大変なのだが、そういう気持ちを持った指導者が生徒を指導してくれていることに、感謝の気持ちがあふれてきた。41チーム、1600人の加盟部員以上の数のドラマが、日々展開されているのであろう。連日猛暑が続いている。健康にはくれぐれも十分な配慮をお願いする。

大会が終わった夜から東京オリンピック2020が始まった。前半は柔道のメダルラッシュが続いた。中でも阿部一二三、詩兄妹の同時金メダルと、大野翔平選手の金メダルが印象に残っている。明桜高校と秋田南高校の決勝戦、4回裏秋田南高校の攻撃、無死1塁。4番打者の打球はセカンドゴロ。ここで明桜高校は4-6-3(セカンド→ショート→ファーストとボールが転送)のダブルプレーを完成させた。明桜高校のセカンドとショートは石田恋君と石田一斗君の兄弟(一斗君がお兄さん)。兄妹で獲得したオリンピックの金メダルに勝るとも劣らない、兄弟で完成させたダブルプレーに思えた。そして大野翔平選手。金メダルは素晴らしいが、それ以上に評価されていたのが、礼儀正しさ(礼の美しさ)である。柔道は「礼に始まり礼に終わる」と言われる。どんな状況においてもそのことを忘れない真摯な態度が、日本の柔道の価値をより高めているようだ。中学校3年生の道徳の教科書に彼の美しい礼の姿が載っていた。日本人の心を表しているようだ。

たくさんのドラマのある高校野球。礼儀正しさ、マナーや感謝の気持ちも忘れず頑張ってもらいたい。炎天下の中、新チームで行う各地のリーグ戦もスタートした。コロナ禍ではありますが、高校野球ファンの皆様には今後とも御理解と御支援をお願い申し上げます。

2021年8月2日